

第14回伊達市総合教育会議 会 議 録

1 日 時

開 会 令和6年9月26日(木) 15時00分
閉 会 令和6年9月26日(木) 16時20分

2 場 所

市役所本庁舎 2階会議室A・B

3 出席者氏名

伊達市長	堀 井 敬 太
伊達市教育委員会教育長	影 山 吉 則
委 員	早 瀬 芳 宏
委 員	平 田 賢 弘
委 員	岩 本 秀 一
委 員	大 西 稚 子

4 欠席した教育委員の氏名

な し

5 会議に出席した職員の職氏名

市長部局	
企画財政部長	岡 村 崇 央
企画課長	佐 藤 広 教
企画調整係長	三 浦 正 貴
教育委員会	
教育部長	山 根 一 志
教育部参与	山 田 智 章
学校教育課長	今 藤 康 之
生涯学習課長	上 山 昭 二
図書館長	阿 部 博
指導室参事	本 所 章 宏
学校教育課企画総務係長	渡 邊 純 一

開 会 （15時00分）

◎佐藤企画課長

本日は、お忙しいところお集まりいただきまして誠にありがとうございます。ただいまから、第14回伊達市総合教育会議を始めさせていただきます。本会議につきましては「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第1条の4第1項に基づき協議するものです。それでは、これより先の進行は堀井市長よりお願いいたします。

◎堀井市長

皆さま、お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。それでは、さっそく議事を進めさせていただきます。

本日の会議に付す事件は、協議第1号から報告第2号の3案件です。皆さまから様々なご意見を賜りたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

まず、協議第1号でございます。「伊達市内小中高だて学連携会議について」であります。本日、北海道伊達開来高等学校の栗島教頭先生にオブザーバーとして参加いただいておりますので、教頭先生よりご説明をいただきたいと思っております。

◎栗島教頭

それでは、だて学連携会議ということで、私の方から説明をさせていただきます。今、市長からご紹介ありましたように、私、伊達開来高等学校教頭の栗島と申します、よろしく申し上げます。

だて学について説明する前に、まず、皆さまご存知だとは思いますが、本校の成り立ちについてざっと確認いたしたいと思っております。本校ですけれども、平成30年7月に市民による検討委員会が組織されまして、新しい高校づくりに向けた議論がスタートしました。当時、伊達市内には3間口の伊達高校とそれから4間口の伊達緑丘高校の2校がございました。この2校の再編統合にあたり、伊達市にどのような高校ができればいいのかということで、当時の中学生も含めまして、市外の高校へ通ってる高校生や、あるいは保護者とか、そういういろんな方に話を伺ったと聞いております。その中からは、市外の高校に行かなくても難関国公立大学にも合格できる高校が欲しいとか、民間就職や看護、公務員志望にも充実した指導をしてほしい、部活動で活躍できる高校が必要だと、グローバル社会に通用する英語力が欲しいんじゃないとか、多くの市民の願いに応えまして、生徒の多様な進路希望を実現するために、令和3年4月に6間口の伊達開来高校が開校しました。現在、本校は開校4年目を迎えて、この3月に初めて卒業生を出したところがあります。その中で、開校時より市の方からの強い要望としまして、だて学に取り組んでほしいというものがございました。

じゃあ、そのだて学って一体何かというお話なんですけれども、ちょっとこのスライドでは小さいので、別添資料の方でコンセプトフローをお配りしておりますので、そちらをご覧ください。小中高連携した取り組みってということなんですけれども、そもそもそのだて学というのが、地元愛に根差した地域創生の原動力となる伊達プライドを持った伊達人の育成を目指すという、そういうプログラムになっております。

小中高という発達段階それぞれに応じまして、地域貢献活動、それから社会参画意識の醸成に向けた取り組みを積み重ねることで、地域を発展させる人材の育成を図ることを目的としております。本校は、道立の学校ではあるんですけれども、市内で唯一の高等学校ということになります。また、その成り立ち、先ほども説明いたしましたように、市民の

皆さまからの、伊達の子どもたちは伊達で育てるんだ、そういう学校を作るんだっていう、そういう熱い思いから誕生したっていう、そういう経緯がありますので、小中高の学びの一貫性、つながりっていうのは、非常に重視されているのではないかという風に考えて取り組んでいるところであります。それで、本校でだて学というのは、学校設定科目ということで置いています。そもそもその授業としてどういう風に成り立たせようかというところで、総合的な探求の時間というものの発展として置きましょうということで計画を立てています。1、2年次で総合的な探求の時間ということで、様々なフィールドワーク行ったりとかという経験をするんですけども、それを基に3年次生全員が2単位で履修する科目として置いております。そして、これは3年次生全員履修するものにしてあります。地域貢献をテーマとして、伊達市を中心とした西胆振地区の課題解決のために、何かテーマをそれぞれ自分たちで決めましょうということで活動しています。今年度は、資料にありますような9つの分野に分かれて、自分たちに何ができるかというのを色々こう模索している授業です。

じゃあ、実際何やってるのかと言ったら、生徒たちは毎週火曜午後の2時間を使うんですよね。その中で、探究活動ということで、インターネットによる調べ物もちろんなんですけども、それだけではなくて、オンラインとか対面でいろんな講師の方から講話いただいたり対話を重ねる、あるいは現地調査活動ということで外に出て行って実際に見てみるとか、そういう活動を色々しながら自分たちの仮説を検証します。そして、最終的には全体発表ということで、全校生徒の前で発表するんです。ちょうど今、今年度の発表に向けて各分野で、その分野の中での発表会が行われ始めているところです。大体4、5人ぐらいのグループに分かれて、それぞれ探求を重ねまして、その中の各グループの中で優秀なところ1つだけ選んで全体発表ということで、体育館で全校生徒の前で発表します。去年は、堀井市長、それから市議の皆さんにも、ちょっと別日なんですけども来ていただいてってことでやったんですが、今年はこの場に、せっかくなので全部の発表を見ていただくと思って、お呼びしようと思って計画しておりますので、またそれについては後日文書発送いたしますので、よろしく願いいたします。

このだて学なんですけども、最終的に、先ほども説明いたしました、地域創生をする人材育成を目標としています。ですので、小中高の連携が重要なポイントとなってきますんですけども、先ほど説明しましたように、本校では3年次で取り組んでいますので、昨年度は実は初めての実践でした。そのため、小学校、中学校でどのような学びをしていって、どんな活動してるのかもちょっとわからないという状況だったので、今年度、本校校長が旗振り役となって、小中のだて学の担当で集まって会議しましょうというのを設けました。それがだて学担当者連携会議です。第1回はこちらに今出している日程で行ったんですけども、各校、教務主任を中心として集まりました。そして、各校の年間計画の情報交流を中心に行ったんですけど、これまで単独で各学校自体が実施して、他校の様子を知る機会が本当に小学校、中学校同士でもなかなかなかったようでして、非常に意義のある会議だったという風に感想もそれぞれから聞こえていました。それを基にこの担当者会議が発足したことから、小中学校の方で、今年度の市内教育実践交流研修会のテーマとしてだて学が取り上げられるという運びになりました。こちらの研修会なんですけども、毎年夏休みに義務教育段階の先生方皆さんが集合して行われる研修会だと伺ってます。先ほどお話しした担当者会議ができたので、全体でだて学っていうのをちょっと深めませんかということで、各校の実践を交流して、先生方の意見交換も行いました。

やっぱり各校ともそれぞれの学校の取り組みを聞くのは初めてだったっていうことで聞いています。じゃあ、実際に協議の中でどんな意見が出たのかというと、ここに抜粋なんですけども、色々出していただいています。いずれもやっぱり実際にやってる方々としては切実な意見だなという感じを受けました。そして、この研修会を受けまして、今後の課題なんですけれども、やはり意見の中でもたくさん出ていたんですけども、系統性、連携持った取り組みが重要ではないかと。それも実際にどこに行ったとか、どんなことしたっていう、そういう内容ベースの話ではなくて、それぞれの発達段階でどんな資質・能力を身につけたのか、それをどういう風につないでいっていかっていうところを軸にして固める必要があります。それぞれの学校がどのような生徒、どのような児童を育成するかって、そこを明確にした上で、活動を通してどのような生徒にしていくのかっていうところ、どのような力を身につけるのかっていうのを職員の共通理解として持つ必要があるなど感じています。それには教育委員会のみならず、市や議会との連携も重要になってくるかと思えます。今回は、担当者連携会議は本校主体でやりましたけども、じゃあ今後はどうするんだ。各校が自分事と捉えるために、あり方もちょっと検討が必要だなと思っています。そこには教育委員会の方にもぜひ積極的に関わっていただけると、色々やりやすいのかなということも感じております。

少子高齢化が進んでいるのは全国どこでも同じなんですけども、伊達においても地域支える人材育成は大きな課題となっています。だて学ってということで、これを目標としているので、その伊達で育てくれた子が伊達で活躍してくれたら、こんな嬉しいことはないなと思っています。ただ一方で、伊達で活躍してくれるというのも大事なんですけど、ここで伊達で地域というものを学んだ子たちが、それを基にして全国各地で、その自分が行った先で自分の役割を見つけて地域貢献に励んでくれたら、その方がずっとずっとなんか意味があるかなと思っているので、そういう人材育成ができるように今後も我々としては尽力していきたいなと思っています。そのためにも色々協力要請することもあるかと思いますが、どうぞ今後ともよろしく願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

◎堀井市長

栗島先生、ありがとうございました。ただいま説明がありましたけれども、皆様からご意見、ご質問等ございませんでしょうか。

◎早瀬委員

質問ということではないんですが、最初にだて学ってという言葉聞いた時に、素晴らしい取組だなと思いました。私なんかも学生の頃、例えば教科書で習うことっていうのは、どっかの遠い世界の話のような気がして、ただ、覚えようとしたり、なんて言うんでしょうかね、そういうことをしようとしたのがだて学ってということで、この本当の伊達のことを勉強する時間ができるんだということで、すごく期待をしておりました。

今、どういう取組を小中学校でされてるのかまでは詳しくわかりませんが、だんだん、こういうAIですとか、バーチャルの時代になってきているからこそ、例えば伊達の草花の名前を知るとか、ちょっと前の朝ドラで、雑草っていう草はないって言ってましたけれども、全部覚える必要はないですけども、いろんな植物の名前を覚えるとか、例えば小鳥の名前、たまに黒と白の、こう、鳥がちょこちょこっと歩くような鳥の名前を、伊達にいる鳥の名前を覚えるとか、そういう草花とか鳥とか、そういうことも学びながら、実際にこう自分の足で歩いて、こう手に取ったりしながら、伊達のことを理解していく時間も、もし作れるのであれば、ぜひ取り入れていただければいいんじゃないかなと思

いました。

◎堀井市長

ありがとうございます。今ご指摘あったようなことというのは、その、今後に向けての課題に書かれてましたけれども、さっきの会議の中とかでも、何か意見交換されたこととあって、あたりしましたでしょうか。

◎栗島教頭

具体としては、こういうことやったらいいとかというのが、それぞれの発達段階で、自分たちの学校ではこういうことやってるんだけどというのがあったんですけども、地域を知るというのは、その小学校段階でしっかりやった上で、色々発展していければいいねという話その研修会の中でも出ていました。

◎平田委員

1つお聞きしたかったのが、このコンセプトとしては、とてもいいとは思いますが、子どものモチベーションというか、どのような気持ちでやっているのでしょうか。好きでやってる子もいると思うんですけども、そうではない子もいるのかなと。

◎栗島教頭

正直言うと、やっぱりそれぞれ温度差があるというのは事実です。ただ、グループでやっていますので、その中で色々引き上げられたりという部分もありますし、先生方もその時間その時間で色々こうアドバイスをしていく中で、あと他の班の様子も見る中で、ちょっと変容していく部分もあります。でも、やっぱり最初の課題設定の部分ですごく苦労するので、一応高校生なので、その地域の課題解決に向けた提案をしようということやるんですけど、でも、そもそも地域の課題は何なんだっていうところからわからなかったりするところもあるので、そういうところでもやっぱり小中の積み重ねがあると、そういえばあれがあったねとか、そういうのがあるといいなという繋がりになっています。

◎平田委員

例えば、先ほどドリーマーからプランナーって、そして、その次が多分パイオニアみたいな形でより実践をしていかなきゃいけないと思うんですけども、例えば登別青嶺高校だったら、実際クラウドファンディングやりながら、いろんな実現をして、どんどん前に進んでいるんですね。そうだと、多分楽しいと思うんですね。実際、自分たちが夢描いてたものが、それを計画して、実現していくっていう。それでじゃあ面白いかなってなってくると思うんで、おそらく発表というのも1つの成果だと思うんですけども、やっぱりもう一方では、ちゃんとこう面白いなって感じる、泣き笑いというか、苦労みたいなものがあってもいいんじゃないかなと思います。

◎栗島教頭

そうですね、やはりその実践までたどり着かないというところが、今の現状、課題かなと思うので、去年のこうなったらいいなの発表だけじゃなくて、自分たちはそのためにこんなことができました、そこで平田さんおっしゃるように、その上で失敗したから、じゃあ今度こうやってみようみたいなところまで持っていけるようにしていきたいなというところまで進んでいるところですね。

◎大西委員

7月に、おそらく開来高校の生徒さんというか、担当の先生からファックスいただいで、何かお手伝いできることとか、地域に貢献っていう意味でご案内いただいで、ちょっと返信したかどうかあまり覚えてないんですけど、冬とか、やっぱりお店を営業す

るにあたって、雪がお店の前に溜まったりとかって事があって、そういうのを雪かきとか、地域のお年寄りとかのお家の雪かきをするみたいな、そういうことになってしまったりとかするかもしれないんですけど、やっぱり地域の方々というか、お店よりもやっぱりお年寄りとかも増えてきてるので、そういう若い世代がお年寄りに声をかけてあげたりとか、たぶん出勤時間とかって早いので、高校生がさらにその前に雪かきってなると、本当のボランティアで本当に大変だと思うんですけど、ちょっと近くの家のところからとか、そういうのもちょっとあると、地域の方々との横の連携というか、なんか、そういえば開来高校の生徒さん手伝ってくれたよねとか、ちょっと顔を知ってもらっていう、うまく言えないんですけど、そういうところもあると、伊達人としていいのかなっていう気はしました。

◎栗島教頭

そうですね、さっきの話と繋がるんですけど、どうしてもまだ今のところ、机上での話だけになってしまってる部分があって、実践ベースとして、本当に人と人としてどう関わられるか、今後は繋げていけたらいいなと思っていますし、何ができるかっていうところを踏まえて。でも、その対話も今の現状から見ると、実際にじゃあ伊達市内の高齢者の方と話したグループがあるのかって言ったら、それってあんまり無いんじゃないかな。スマホ教室やった班ぐらいかなと思うので。そういうところもちょっと視点として広げるように促してみたいと思います。

◎岩本委員

このだて学って結構ゴールが難しいと思うんですよ。自分の人生を考えても、高校生の時にどこまで色々考えてたかっていうと、結構幼かったなと思うんですけど、実際に自分がこの仕事をして、やっぱりこうプレゼンテーションする機会って今まで無かったのが、やっぱり大人になってすることになったと。だから日本人ってプレゼンテーションは下手だと思うんですよ。やっぱり経験がない、たぶん他国と比べて。だて学をやって、それがきっかけの1つとして、こうやってみんなの前で発表するみたいな、実はいい経験かなと思うので、やっぱりそのプレゼンテーションするためには、そのためにデータ揃えたり、コンピューターってね、本当はこういう風に使うんだよってのがやっぱりわかるわけで。だから、そのプレゼンテーションってのは、1つのゴールの形として決して間違いではないと思うので、もっとその発表する機会を校内だけじゃなくて、逆に、活動センターでもっと一般の人も見に来ると。それによって、次に繋がったりとかというのが、実際の職業体験よりも、そういう人と人の繋がりが将来伊達で就職したくなるようなきっかけになったりとかすることもあるのかなと思うので、そのプレゼンテーションする機会を校内だけで留めず、結構難しいですけどね、外の人との交流の場所にするってのも1つなのかなと思ったりもしました。ただ、自分の経験的に、プレゼンテーションする機会をまずもらえたってのはすごくいいことだと思うので、決して無駄じゃないかなと個人的には思います。

◎栗島教頭

ありがとうございます。今年度のだて学発表会については、オンラインで市民の方も視聴できるようにという風に計画していて、市の広報の方にも、そのQRコードとか載せるようにということで動いております。

◎岩本委員

なんか大人を巻き込めたらもっと面白いのかなという感じがしますよね。

◎早瀬委員

こんなこと言うのとあれですけども、伊達の問題を発見したり、それをこう解決する、あれをするっていう話でしたけども、あんまり難しいことはね、市長と市議会議員にまかしておいて、高校生らしい視点で思いっきり、例えばピンポイントの何か1つ絞り込んで、それを取り組んでみるとか、そういう方が意外とこう、一点突破じゃないですけども、後々の広がりがあったりとか、ちょっと抽象的な言い方ですけども、あるんじゃないかなと思ったりします。市の課題を解決するとかっていうのは、なかなか結果もぼやけそうですし、高校生らしい、なんかのびのびとした、こんなことやっていいのっていうようなことをやってみてもらった方が、ひょっとしたら面白いんじゃないかなって思います。

◎影山教育長

今、プレゼンの機会って岩本委員がおっしゃってて、それで思い出すことは、今年の冬でしたかね、市長も参加されましたけど、日本海水学会の若者の研究者たちがカルチャーセンターに集まって研究会を開いた時に、栄高校の生徒と開来高校の生徒が高校生として呼ばれて、プレゼンをやったり、ポスターセッションでいろんな質問が来たやつを四苦八苦しなげながら返したりしてるようなのを見て、確かにこう何か課題を明確に出して、こう解決するっていうことも1つ、さっきクラウドファンディングっていう平田委員からの話もありましたが、そういうこともすごく大切だなと思うので。ただ、とても勇気のいることでもあって。そういう取り組みと他に、学術的ないろんな場面で、そういったようないろんな専門家と交流していくっていうのも1つやっぱり子どもたちの知的なレベルを上げるって言い方はちょっと適切かどうかわかりませんが、そういった面で、学校全体がアカデミックな雰囲気になってくってことも非常に重要なので、そういった取組っていうのも非常に大事にした方がいいかなと思ったんですね。ですから、今回はたまたま室工大さんのお世話で、海水学会の外から来たものと上手くコラボできましたけど、開来の方で工大と連携協定結んだので、工大さんと色々相談しながら、開来の生徒が工大の方に乗り込んで、学生さんとやってもいいんじゃないかなっていう、そういった取り組みにも繋げられるかなっていう風に思うんですね。それで、早瀬委員の言われたとおり、本当に一点突破、だから、校内で選抜しながらこう発表を重ねていくって面白いなと思って去年も感じてたんですけども、その中でこう、なんかテーマが修練されていって、今年度はこれやるかみたいな、そういったところが出てきても、きっといい形になるかなと思うんですね。

あと、市全体で考えた時に、今年、ちょうど開来高校の藤村校長先生の方からお申し出があって、ぜひ校長会に行って、こういう会議体を作りたいってことを自分から提案させてほしいって春に相談を受けた時に、素晴らしいですね、ぜひお願いしますっていうことで。藤村校長先生が校長会に来て、校長先生方に提案して、そして校長たちが受けて、成立した会だったので、この前も教頭先生に私もお話ししましたが、当然、行政的な部分で教育委員会もしっかり関わることは大事だなと思ってんですけども、その先生方の現場のところでできたこの会議体っていうか組織体っていうのは、また1つすごい意味があるかなって思っています。なんでもかんでも教育委員会主催ですと、やっぱり、とりわけ小中学校の先生方からすると、設置者側になっちゃうので、何か言っても指示か命令か指導かみたいな、そういったようなどうしても印象が強まっちゃうんですね。だから我々もこうお願いしたりする時って注意をするんですけども、そういったところを考えた時に、今回のこの取組の始まり、まだ緒についたばかりですけど、すごく第一歩から良かったので、だから、こういう形をさらに主体的に学校間でこうやっていただいて、そして、行政側が

いろんな、例えば会場1つ取ったりなんだりとか、いろんなお膳立ては全部やりますけど、そういったところを主体は学校側の方がむしろいいかなっていう風には思ってます。それで、やはり開来高校の素晴らしいのは、やっぱり単位制の高校なので、最終的に週2時間っていうことで、2単位で全員必履修っていう形で、卒業単位に入ってる形でのだて学なので、生徒のモチベーションも当然これで評価されないと、卒業に関わるし。そして今、だて学のような、この取組のプレゼンが今回も合格者出てますけど、総合選抜で、こういったもののプレゼンで、国公立が入ってるっていう、次第にどんどんなってきたので、そういった意味での目先のモチベーションというのは当然あるんですが、その分、やっぱり小中っていうのはすごく弱くて。小学校は、まだ、先生が右向け、右と言ったら、大体の子は右向くので、中学校は右向け、右と言ったら、半数以上は左向くので、そういったところで、思春期がバッティングしますから、そういう面で、中学校の先生の方々はとても苦労されてるのはわかるんですが、その中で結果的に中学校の指導が妥協的になっちゃってるんですよね。だから、それは中学校の先生なりの苦しさがあるというのも、私も理解はしてるんですけど、ただ、そこが、例えば教育委員会が、そんなんじゃ今の学習指導員に合っていないでしょっていう指導をするよりは、高校の新しい取組をこう見ながら、やっぱりもっとこうやってやっていかなきゃなんないんじゃないかってことがわかるってことが、とってもいい成果を上げられるかなっていう風に思いましたので、今回のこの担当者連携会議を作ってくださったことに感謝いたしますし、今後もさらに出された課題が解決できるように、どんどん進めていけるように、私たちも頑張りたいと思いますので、さらに具体的にいい成果を上げれるようにね、進めてまいりましょうっていうところであります。

◎堀井市長

私も去年、発表見させていただいて、高校生の方が伊達に対してきちんと課題分析してるなとも思いましたし、何かこう、自分たちでできることやっていこうという前向きな気持ちがとても感じられて、すごくありがたい会だなとも思いましたし、生徒たちにとってもすごく有意義な時間だったんじゃないかなっていう風に思います。このだて学、効果としては3つぐらいあるかなと思ってて、まず1つ目は、インナープロモーションというか、やっぱりこう郷土愛とかを皆さんが学習っていう場を使って、体系的に学び直すっていうのが1つあるかなという風に思います。例えば高校生で、高校生から大学上がる時に、1回外に出ちゃったとしても、また伊達に戻ってきたいなとか、伊達ってこういう特徴がある町だな、いい町だなっていうのを思っていたくっていうのはすごく大事ななと思うので、インナープロモーションという面でもすごく大事ななという風に思ってます。2つ目は、先ほど岩本先生が言っていたようなプレゼンテーション能力。やっぱり外にこう、どうやって生徒が表現するかっていうところがすごく身につくものだなという風に思ってます。すごくプレゼンテーション上手な子もいましたし、セリフを本当に一語一句書いて、いや、私、今の子すごいなと思ったのが、携帯見ながら文を読むっていう、逆に私は携帯だったら文字ちっちゃくて見えなくて、近づけながら見ると思うんですけど、それが生徒たちはちゃんとこう考えて自分の話すことを話してたのがすごいなという風に思いますし、本当にプレゼンテーション能力がつくなと思います。あと、やっぱりプレゼンテーションするっていう前提としては、3つ目としてはロジカルシンキングがすごく大事ななと思ってて、課題にどうアプローチするかっていう時には、そういった論理的な思考っていうのはすごく大事ですんで、ロジカルシンキングも鍛えられるようなプログラムに

なってるんじゃないかなという風に思います。その他、やっぱりこう話をまとめていく中では、対話力が向上したりとか、もちろんこう、アクティブラーニング、自分からこう情報を取りに行つて積極的にやっていくということなので、アクティブラーニングの視点であるとか、そういったことも統合されている、だて学ってすごくいいものだなと思いますので、ぜひ今後とも発展していただけるようお願いしたいなと思います。あと、課題のところにも出てきましたが、その学年間での系統的なやっぱり学びっていうのは本当に大事だなと思います。その学年ごとに、発達段階に応じてどういった領域を学ばせるのかとか、ある程度インプットしなきゃダメなタイミングもあると思うので、座学みたいなタイミングも出てしまうと思うんですけども、じゃあ、どこの学年はそういった、インプットの時間にこう使うべきだとか、どのぐらいの発達段階になったら、ある程度ちょっと簡単なことをやらせてみるとか、そういうのももっと系統立てて考えていった方がいいのかなというのと、あと、その縦の学年ごとの系統ってのもそうだし、このだて学っていうものが、各教科へのこう接続みたいなのところも、ちょっと今はやっていただいているかもしれないんですけども、十分そこも気を付けていただければすごくありがたいなと思っていて。というのも、私自身もだて学ではなかったですけども、郷土学習って昔あったと思うんですけども、どうしても、あんまりいい発言じゃないんですけど、郷土学習頑張ったところで別に受験勉強に何も活かないから、正直それって時間の無駄だなとか、あんまり意味ないなと思っちゃうんですよね。ただ、やっぱりこうだて学の中で、この例えば歴史的なところだったら、そういうこの社会の方向になったのは、日本全体的で見たらどういった出来事があったからその影響を受けてこういう意思決定になったんだとか、こういう政策の方向性になってるんだとか、それが、もっと言ったら世界史もそうだと思うんですけども、世界と日本と伊達と、そこのこう教科の中でもうまくこう連携させるであるとか、あと、その伊達の課題って言われた時に、伊達ではそれは課題なんだけれども、日本全国で見たら首都圏だったらどうなのかなとか、そういったところも1回こう視座を広げることで、自分たちの今やっている、本当に学問的なというか、いわゆる偏差値とか点数とかの学習のところとも接続しますし、多分それをするすることで、ものすごく効率的に、よりこう、腹落ちするような勉強の仕方ができると思うんですよね。ですので、その縦の連携と、あと教科間の連携っていうのも意識して、幅広にやっていただければ、もっとなんか厚みのある、すごくいいプログラムなんじゃないかなっていう風に聞いてて思いました。

◎栗島教頭

今、市長がおっしゃったことはその通りだなと思っているので。あと、本校でも教科横断的な学びっていうのをどういう風に取り入れていくかっていうのはまさに課題で、今日ちょうど前期の中間反省をやってるところなんですけど、私出てくる前にもそんな話が出ていましたので、だて学っていうのはそういう意味では非常にフックになりうる存在だと思うので、色々仕掛けを作れるように働きかけていきたいと思います。

◎堀井市長

他にご質問、ご意見はございませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

◎堀井市長

それでは、協議第1号につきましては、このとおりに取扱いたいと思います。ここで栗島教頭先生は退席されます。ありがとうございました。

次に、報告第1号でございます。「令和6年度全国学力・学習状況調査の伊達市における調査結果について」を指導室参事より説明いたします。

◎本所指導室参事

それでは、私の方から説明させていただきます。よろしくお願ひいたします。データの方で資料を配付いたしましたので、こちらを基にご説明させていただきたいと思ひます。まず、表紙がありまして、1ページ目は概要、目的でございます。今年度は、国語とそれから算数数学の2教科での実施となっております。早速結果の方なんですけども、ご覧いただきますと、まず、小学校の国語、全国平均が67.7に対して、伊達市の小学校が70.9ということで、大きく全国平均を超える結果となっております。これ5年ぶりです。小学校の算数の全国平均が63.4に対して、伊達市の平均が64.2ということで、こちらも全国平均を超えております。これ7年ぶりです。今度、中学校の国語ですが、全国平均が58.1に対して、伊達市が59.7ということで、こちらも超えております。ちなみに、全部、全道、全国を超えているという結果です。そして、中学校の数学ですけども、全国平均が52.5に対して、伊達市が52.0ということで、0.5点全国平均は下回っておりますが、全道平均が51.0ですので、全道平均は上回っているということで、いい結果に数字的にはなったかなと思っております。

次のページがそれをちょっとグラフ化したものであるんですが、先ほどお伝えしましたが、小学校の国語とR1で全国平均を1.9上回った、あと、R2はコロナで実施なかったんですが、その後、ちょっと下回っていったところ、今回がぐんと増加して、それから、算数の方も同じく、こちらですね、もっと遡って、昔、算数は2つに分かれてたんですよ。応用と基礎に分かれてたんですけど、それ以来の全国平均を上回る結果になっております。本当にこれ、学年の集団によってやっぱりちょっとこうばらつきがありますので、昨年、教育委員さんの前でお伝えしたかなと思うんですけども、ちょっと昨年は、中々学習が難しい学年っていう質問したと思うんですけども、今年度、その差もあったのか、このような結果になっております。ちなみにですね、次、中学校のグラフを見るんですが、この小学校のこのグラフにおけるR3の数値のところは今の中3のお子さんが小6の時のデータになります。つまり、中学校3年生のお子さんが小6の時がR3ですね。どちらも全国平均はちょっと下回る。国語はマイナス1.4、算数がマイナス2.5になってるんですけども、今年度、中3になってですね、3年ぶりに実施をしたっていうことで、国語の方が全国平均を上回って、改善したという風に見て取れるかなと思ひます。それから、数学の方は若干下回ったんですが、小学校時代と比べると、全国平均に近づいてきているということで、中学校の先生方の頑張りが見られるのかなという風には見て取れるかなと思ひます。

この全国学力・学習状況調査なんですけども、これはテスト終わった後に、すぐに学校の方で自己採点をして、ほぼほぼ把握できますので、正答率の低い分野を把握し、それに向けてすぐ学び直しの時間の設定、もしくはそこを宿題にしたりとかっていう風にして対策を講じております。国のデータや道教委のデータを待っていると10月、11月とかになってしまいますので、それでは遅いので、もうすぐに把握をしてすぐに手をつけていくと。それから、これ小6と中3が実施してるんですけども、その該当学年だけの先生が分かっているのではなくて、全校の全職員で共有するようにしてもらっています。それによって、この分野が落ちてるということは2年生の掛け算から始まっているんだなであったりとか、4年生の面積からだなというような形で、全職員で取り組んでもらうようにしております。今現在、各学校にそれぞれの分析、細かいデータ行ってますので、分析をしてもらって、

来月報告を受けることになるんですけども、分野ごとの弱点やむしろ逆に伸びたところはあるところ、学校ごとに分析をしていただいているところがございます。

続いて、児童生徒質問紙、それから学校質問紙がございまして、その中でいくつか抽出しております。②ですね、自分にはよいところがあると思う児童生徒の割合というところなんですが、昨年と比較すると、これ下がってるんですよ。R5の小学生が自分にはよいところがあると思ったのが94.8%で、今年度が78.5%なので、それから中学生も95%から85%に下がってはいるんですが、ちなみに、これR4も調べてみると、小学校が78.5%、中学校が76.6%ってことで、去年がすごく突出してたのかなと。R3も70%台でしたので、70%、70%と来て、去年が94%。すごく自己肯定感が高い学年だったんだなと思うんですが、この数値だけ見ると、下がっている、何かあったのではというような感じもするんですが、大体このぐらいの思春期も含まれるというところなのかなというところがございます。それから③、将来の夢や目標を持っている児童生徒の割合、こちらですね、比較すると62%。85.9%から中学校では62%ってなってるんですけども、その前のR4も62%っていうことだったので、数字だけ見ると下がっているんですが、去年はすごく高かったんだなというのを見て取れるところがございます。それから、④、⑤は教科について、国語の授業の内容がよくわかるという風に答えた生徒の割合でございます。大体70%から80%台で推移しているんですけども、中学校の数学の方では、⑤の方ですね、68.4%から75.7%ということで、中学校で上昇しています。それから、学校のアンケートのものなんですけども、ICTに関わってで、その中でも特性や理解度、進度に合わせて活用しているかの割合でございます。小学校の方ではほぼ毎日使用しているというのが80%、学校数が少ないと数がこう極端になっちゃうんですけども。中学校で33.3%なんですけども、この次ですね、週に3回以上というところで、他の学校66.6%になっておりますので、週3回以上使っていると100%という風になって、しかも、これはただ普通に毎日使ってる割合ではなくて、この進度に合わせてですから、子供たちが自分で考えてICTを使っているような頻度ってというような形の質問になっております。ほぼ毎日使ってますかでは、小学校では100%、中学校でも66.6%となっております。

次は、問題別調査結果ということで、具体的に各教科での領域ごとの点数になっております。この黄色い網掛けしてるのは、全国平均以上、それから、ここにはないですけど、次の算数とかで青の網掛けしてるのは、無回答が10%以上のところで色をつけております。小学校の国語は全国平均を超えている項目が非常に高く、よく頑張ったかなとは思いますが、あえて1番正答率が低かった問題がですね、実は漢字なんですよね。今年度で出された漢字が競技、スポーツ競技を開始する競技という漢字の書き取りだったんですけども、こちらが52%、正答率が半分ということで、伊達市の正答率の中では1番低くなっております。無回答率も8.9%ということで、これも無回答の中では1番高い。この競技の競うという字は4年生で学習しており、それから競技の技の字が5年生で学習しているので、4、5年生で学習しているものが抜けちゃっているのかなというところで、この辺は、各学校も手を打って、漢字の学習をというところなんですけども、ちょっと苦手になっているところだということを見て取れました。逆にですね、記述式の問題が毎年苦勞するところで、字数の制限があったり、条件を満たした上での書き取りってあるんですけども、今年度はですね、割と善戦してたと言いますか、例えば、自分の考えだけではなく、相手の考えも取り入れた上で答えを述べようとかっていう、苦戦しやすいようなところなんですけども、今年度はですね、それで79.2%を取ってたりっていうところで、非常によく頑張っていた

かなという風に考えております。

次に小学校の算数でございます。算数も全国平均を超えている項目が非常に多くて、頑張ったかなと思います。1つだけ青印があり、無回答のところでございます。これは折れ線グラフから読み取ってというところで、資料を見ていただけたらと思うんですが、結局これも説明をする記述式のところでございます。グラフを読み取って、条件に当てはまって自分の言葉で用いて説明しなさいっていうところで苦戦している。無回答、何も書けなかったってことが12.4%で、先生方も何も書けない、ノーチャンスじゃなく、必ずなんか書いてと声はかけるんですけど、それでもやっぱり手が出なかったってところかなと。それでも全体的には非常によく頑張ったいたかなと思います。

中学校の国語になります。中学校の国語も全国平均を超えておりますので、非常に頑張ったかなとは思いますが、1番正答率が低かったのが、これも記述式のところですね、これも、問題に出てくる相手の意見を読み取って、それを理解して、それと結びつけて自分の考えを書くという、なかなか難しいんですけども、そこで、正答率が43.9%ということで、平均を下回ってます。無回答も10%を超えている。ただ、自分の考えを書けなかったら、なんとか行けるとは思うんですけども、相手の言ってることも理解して、それを踏まえた上での自分の考えですから、当然相手の考えも入れながらの自分の考えってところがなかなか難しかったかなというところでございます。ちなみに、小学校で低かった漢字ですけども、中学校の方の漢字は72.2%の正答率だったので、中学校では回復と言いますか、ただ、今回、すごく簡単に私は感じたんですけど、満ち足りる、満ちて足りるっていう漢字だったんですけど、満ちるというのは4年生で習って、足りるっていうのは1年生で習ってるんですよ。満ち足りるという連続しての言葉で書けるかっていうところだったんですけど、こちらは7割ということで、もうちょっといけたかなとは思いますが、頑張っていたかなと思います。

最後に、中学校の数学でございます。中学校の数学になると、無回答がちょっと増えてはくるんですけども、1番正答率が低かったのが関数の学習で、関数の式ですね。それを用いて違いを求めるとかというところの証明の問題が1番低くなっておりました。それから、無回答が1番高いのが、この41.4という半分近く手が出なかったということになるんですけども、これ、三角形が合同であることを証明する問題、毎年この三角形、図形の問題はあって、こういう風に証明せよって問題は毎年出るんです。先生方も当然それは理解した上でこう授業は展開してるんですけども、これの定着と言いますか、本当に理解してて、自分の言葉で説明するということに苦労があったかなということで、全国平均もすごく低くはなってるんですけども、同じようにここはちょっと苦戦したところでございます。各学校はこれを用いて分析して、来年度どうしようか、これからどうしようかっていう改善策を立てております。

続きまして、もう1つの資料2というところで、これは児童生徒質問紙とのクロス集計ということで、質問項目に対して各教科、国語と算数で全国平均と比べてどうなっているか、相関性があるのかってところで調べたものです。これ、国からのデータをただ見やすく整理したものでございます。色々、ちょっと数が多いので全部説明するとあれなんですけども、これを各学校の方で参考にしながら子供たち、保護者にも伝えているところなんですけども、例えば1ページの最初の2番、生活習慣、早寝、早起き、朝ごはんに関するところと言いますと、1番本当に上ですね、朝食を毎日食べていますかというところで、していますという肯定評価をあげてる子が、小学校で146人、市と言いますと78.9%、全

国は83.2%っていう風に見るんですけども、その子たちの国語の点数はということで、全国平均と比べて6.4%、この黄色が上回ってるっていうことになっております。そして、算数の方でも、全国平均よりも4.2%上の数字を取って、中学校では178人ということで、80%の子たちが国語では全国平均を超えた、算数の方ではわずかに0.1っていうことだったんですけども、やはりしっかり生活習慣を整えてる子の方が平均点は高いのではないかとという1つの目安になっています。回答数が少ない、例えば1人とか2人とかの、毎日同じくらいの時刻に起きていますか。いや、全くしてませんっていう子2人いるんですけども、では、この2人を見ると、全国平均を超えてるぞってなるんですけど、これを持って結論にはならないかなと思います。なので、この辺はちょっと参考ということでお願いいたします。

次に、家庭での学習ですね。こちらの中でも1つ取り上げてみますと、1番上ですね、普段1日あたりどれぐらいの時間ゲームをしていますかということで、1番上が4時間以上っていうところになるんですけども、4時間以上ゲームしてるっていうのが25.4%ということで、全国よりもちょっと多いです。そして、学習の成績の方も平均点よりもちょっと下回る。中学校の方は、若干全国よりも下回って13%ということで、小学生よりは実は下がってはいるんですけども、やはりテストの方は難しい。当然、4時間以上ゲームをやっているのであれば、勉強時間は削られてるということにも繋がるかなとは思いますが、このように集計をして、全ての質問項目にこう紐付けて出しているものでございます。このデータは、伊達市の全体のデータであり、各学校には各学校のデータが行ってます。児童生徒数なので、よりピンポイントなものが各校には行って、これを分析しているということになっております。資料は以上となります。簡単ですが、今年度の学習状況調査の結果でございました。

◎堀井市長

ありがとうございます。ただいま説明ございましたけれども、皆様方からご意見、ご質問等ございますでしょうか。

◎岩本委員

最初の方の資料で言うと、今年どちらも上昇したということですけど、上昇したっていう結果よりも、じゃあ上昇した理由はなんだったのかっていうことをね、やっぱり考えていく必要があって、多分、各学校の先生方がやっていたらと思うんですけど。なんか、この3年間何があったかなと思って。例えば、小学校だったら合併が多くなって学校統合があったかなとかあるんだけど、あと、そのICTが入ったから上がったとか、何かこう良くなった原因はあるんでしょうか。

◎本所指導室参事

まず、授業のあり方がすごく変わってまして、今まで受動的だった授業が本当に子供たちをどんどん動かす授業になってるんですよ。すぐペアを作って、じゃあこれについて考えたことをお互い本当に短い時間で入れていくんですよ、30秒とか40秒で。僕はこう、私はこう思うっていうようなものを、どんどん取り入れていってアウトプット、自分でこう説明することによってというのを非常に多く取り入れていることですね。それから、ICTの活用ということで、今までは、発表したい人ってなったら、もうやる気のある子、しかも時間も制限あるので1人、2人で終わってたのが、今はそれを書き込んでみんなで共有してみようっていうことで、自分でも参加できるっていうんですかね、こう能動的に授業に参加できるように興味、関心を持ってきたんじゃないかということと、去年から試行

で入れたA Iドリルですね。これ、隙間時間によく使ってもらってるんですけど、早く終わった子は、どんどん自分の進度に合わせてやってくださいとか、持ち帰りもちょっと始めてます。持ち帰りの方でやり取り、自分の進度に合った宿題、学習課題を取り入れてるっていうのも少し効果があるのかなと思います。

◎堀井市長

それは授業中で、先に終わった子がやったりということでしょうか。

◎本所指導室参事

そのようにしている学校もありますし、複式学級、実はすごく有効で、関内小、大滝徳舜警では伸び率が高いです。

◎堀井市長

A Iドリルなので、自分の苦手なところが出てくるということですよ。

◎本所指導室参事

問題を間違ったら、それを補充するような問題が自動的に出される形になります。

◎早瀬委員

我々が受けていた授業とは全然違ってきますね。

◎本所指導室参事

大分違うと思います。今は本当に子どもたちをどんどん動かすような授業になっています。

◎早瀬委員

習熟度別学習がそのクラスの中でできるような状態になってるということでしょうか。

◎本所指導室参事

はい。ですので、子どもたちが立って歩く時間も増えています。昔は黙って授業をうけるような形でしたが、これについて友達と交流してごらんとか、時間を区切ってですけども、どんどん動かすと、苦手な子もそこで交流して前向きになれるというのが全部ではないんですけど、多くなっています。

◎岩本委員

今回、小学校の時弱かった子が、最終的に中学校の出口で上がってるのが1番いいわけで、すごくいいパターンだったんで、やっぱり何が良かったかみたいなのをきちんと認識しておくことが必要かなと思いました。あと、漢字が弱いのは、逆にICTの裏返しでもあるので、昔ながらの朝の漢字の10問テストとか、ああいうアナログもやっぱり漢字には必要なかなと。やっぱり読めても書けないっていうことになっちゃうんで、ICTも大事だけど、そのアナログのいいところも取り入れて、こういうのを分析していただければかなと思いました。

◎堀井市長

他にありますでしょうか。

◎平田委員

なんか見えていて過渡期になっているっていう印象を受けて。実際にあるアナログで勉強することとA I機器を利用するっていうことが、それぞれが各家庭、各個人での受け取り方によって学習に差がついてきてしまって、それを早く取り入れた人が伸びていくし、うまく馴染めなかった子はちょっと停滞してしまうっていう感じになんとかこれを見て思いました。特に、小学校、中学校っていう説明は同じだけれども、例えば放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか。というところで、小学校は家で勉強や読書をして

るが伸びることが多いんですけど、中学校は、当てはまるものがないってことの方が多いってことは、たぶんある程度小学校で形を作ってしまったって、中学校は自分でカスタマイズしてオリジナルでやってることが多いんじゃないかなと思って。実際、小学校までは脳の形を作って、大きくしていったって、中学校は全部やってくっていう。なんか脳科学で言ったんですけど、実際そういうことをうまくやってる子がやってるんだなと感じました。ちょうど時代の過渡期になるなっていうことを感じたので、我々教育委員会もそれを踏まえてやっていかなきゃいけないんじゃないかなっていうのをつくづく反省しながら見ました。

◎堀井市長

他にご質問、ご意見はございませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

◎堀井市長

それでは。報告第1号につきましては、事務局の報告のとおり取り扱いたいと思います。次に、報告第2号「室蘭圏域高校の在り方検討会議について」を影山教育長より説明していただきます。

◎影山教育長

今日、これを報告に挙げさせていただいたのは、先日、今年度初めてなんですけど、いわゆる室蘭圏域、この地域でいくと、たまたま道教委で言う考え方が胆振西学区とイコールになってるものですから、3市3町の首長と教育長が集まって、道教委の担当部局と一緒に、今後の室蘭圏域、いわゆる西学区の高校のあり方、配置を含めてのあり方を検討しましょうという時期に来たのではないかということで設けられた初めての会議体であります。後ほどスケジュール出てきますけども、今後検討が深まっていくということで、まず第1回目ということで、道教委の方からこう分析的なデータを出されて、若干の意見交換をしたというところがあります。ずっと後の方のデータになりますが、ここに出てきておりますのは、実はなぜこういう会議体できたかっていうそもそもの動機は、令和11年に中卒者が大幅減になる。毎年ずっと長く、とても伝統があるんですけども、高校配置計画ということで、毎年のように、今回、例えば開来高校で行けば、6間口定員だったのを5学級相当になっちゃったので、もう来年は5学級募集にしましょうかみたいな、そういったような、こう細かな調整、その中で、学級が一定程度下がってくると再編統合をしましょうかと、そういったようないわゆる対症療法的な計画修正を重ねてきて今まで来たっていうところなのですが、いよいよ道教委としては、令和11年にはもう中卒者が大幅減になって、そのような対症療法的な考え方では高校そのものに活力が無くなっていくと、魅力が無くなっていくということで、このようなスパンでスケジュール感を持って考えていきたいと思います。そして、1番下には書いてますが、室蘭圏域のR11の定員調整に向けて、令和7年度末までに、ですから来年度末までに方向性の決定が必要ということで、その上の水色のバーに書いてますが、このようなスケジュールで考えを進めていくというようなことになっております。それで、このペーパーの最初の方に戻るんですけど、ここから順に、関係法令、道教委ですので、なぜこのように考えていくことが適切なのかっていうところを関係法令とともに結びつけているところです。そして、これが少子化の進展、高校の小規模化が進行している、高校未設置市町村が増加しているっていうことで、これは全道的な高校配置上の課題、それを受けて指針における対応を今までこのように道教委では進めてまいりましたよということでもあります。

ここでは、高校配置計画の基本的な考え方っていうところで、私の方で冒頭で道教委が

この会議体を設置したそもそもの動機について触れたところでありますが、これまでの高校配置計画の基本的な考え方を説明し、圏域協議の必要性と目的について、私の方は雑駁にお話ししましたが、ここでさらに具体的に説明がされているところであります。圏域協議での考え方ですとか小規模校の再編整備基準、とりわけ今は小さな町等で問題になっているのは、右側の1番上に書いてますけど、第1学年1学級の高校の取り扱いというところが問題になってくると。道立で言えば、この近隣では虻田高校がそのような状況になってますけども、2年連続で20人未満となった場合には再編するということで、虻田高校は毎年ここできわどい生徒募集数になっているものですから、今、町から高校が無くなったら大変だということで、今、6月の議会だったでしょうか、洞爺湖町がその支援策を打ち出してきたところであります。これも関係法令等に基づいて、私学との関係っていうのも大事ですから、とりわけこの学区においては室蘭市内に2校私学があると。ですから、人口規模の割に私学も割とあると。かつては登別にも私学がありましたから、人口の割には意外にあるというところで、昔から公私共存の体制はあるんですが、やはりこの私学との関連も考えていかなければならないというところであります。そして、それがここに触れられて書いてあります、公私比率と一般に言うんですが、78.4%対21.6%と。私立側から言うと、これでもまだ足りない。ですから、もっと公立の方を減らしてもらわないと私学が生きていけないということをよく強調しております。ただ、道教委の考え方としては、この学区については従来この程度の比率でいってるので、今後もこういう比率の見通しを持っているようではあります。

こちらの方は、後で見ていただきたいと思いますが、丸数字がその学級数なんですね。1学年のいわゆる間口というやつですが、それがこのようになってますという。平成20年から令和6年にかけて学校が無くなったりし、あるいは再編統合されたりってことでこう変わってきましたよと。そして、令和6年度の段階でいきますと、開来の5間口と栄高校の5間口が最大規模になっているという現状であります。これが室蘭圏域における学科ごとの学科定員、欠員ですね、それがここに示されておまして、もう都市部の恒常的欠員というところが書かれておまして、一応念のため言っておきますが、伊達も都市部扱いですので、そういったところでも恒常的にもう定員が欠員してると。ですから、結局倍率がないんですね。毎年、1月、2月になって倍率出てくる頃に皆さんわかると思いますが、いわゆる1番手校と言われる栄でももう1.0、年度によっては1.0を切ることが普通科でも出てきているというような状況でありますし、最近数年間続いているのは、室蘭東翔高校の倍率があって、室蘭清水丘高校が倍率が低かったりして、室蘭東翔高校を不合格になった子が清水丘高校の2次募集で行くというような現象が、この3月は違いましたけども、去年までは何年間かこう続いていたような状況があります。それだけ色々この学区については生徒数が減っていることから、いろんな面で高校作り自体も難しくなっているというところであります。この辺は市町での生徒の移動の人数ですので、参考にさせていただければと思います。

これがまとめになりますけども、今後、令和11年度に向けて、来年度末までには室蘭圏域でどういう高校配置が適切かっていうところを、繰り返しになりますが、首長と教育長が集まって、道教委と色々検討して、最終的には道教委が決めるんですけども、どういう姿があるべきかっていうところを検討していくという流れになっております。これは冒頭で説明させていただいた通りですし、これが大まかな今後のスケジュール、こういうプログラムで進んでいくということになります。それで、今日ここでお出ししたのは、今

日何かここですごく議論して何かを解決するというのではなくて、今後、次の会議がありますので、それに向けて教育委員の皆様方が、これから定例会もありますので、そういった場面で何かご意見、お気づきの点があったら出していただいて、それを教育長経由で市長の方にお届けして、市長の方の考えの参考にしていただくというような機会の今日は第1回目にしたいということを出しているところであります。雑駁ではありますが、あとぜひ資料読み込んでいただければありがたいです。以上です。

◎堀井市長

ご質問、ご意見はございませんか。

◎平田委員

後々話すことになるんでしょうけど、伊達市において高校がどういう位置付けにあるのかっていうことを、やっぱり伊達市として、教育委員会として明確にしなきゃいけないと思います。単純に、伊達市としてここがあってほしいのか、なくてもいいのか、あるのであれば、進学もできるような学校がいいのか。であれば、伊達市民だけじゃなくって、室蘭や他のところからも生徒を集めなければいけないし、そういう学校を作るのかっていうところを今一度しっかり把握しないと、例えば伊達市から高校にお金を助成するにしても、その裏付けとなってくると思うんで、そのコンセプトをしっかりしなければ土台からまた崩れてしまうと思うので、それを話し合っていけたらと思います。

◎堀井市長

他にご質問、ご意見はございませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

◎堀井市長

それでは、報告第2号につきましては、報告のとおり取り扱いたいと思います。

以上で、本日の日程はすべて終了いたします。

◎佐藤企画課長

これをもちまして、第14回伊達市総合教育会議を閉会いたします。

閉 会 （16時20分）